

# おかしな おぼろのこがへ



## こどものみなさんへ

みなさんは、きっとおとなから「ゆめはなに？」と聞かれたことがあるでしょう。また、「ほしいものはなに？」と聞かれたこともあるかもしれません。では、「あなたのねがいはなに？」と聞かれたことはあるでしょうか？ゆめでも、ほしいものでもなく、「ねがい」。もしもかなったら…と強く思うけれど、だれにもかなえることはできないかもしれない、ゆめよりもひっそりと心のおくにかくれているもの…。

「オズのまほうつかい」に出てくる4にんの子どもたち、ドロシー、かかし、ブリキ、ライオンには、「ねがい」があります。そのなかに、あなたのねがいに、にているものはあるでしょうか。そのねがいはどこから生まれてきたのでしょうか。どうやったらかなうのでしょうか。

さあ、4にんとトトといっしょに、ねがいをかなえるぼうげんの旅に出てみましょう！

## おとなと子どもと、その間のみなさんへ

世界的に有名な「オズの魔法使い」を人形劇に、ということで、「オズ」の全シリーズを読み、むすび座の方々と、また演出の関根さんと、話し合いに多くの時間を使いました。その話し合いの中で、かかし、ブリキ、ライオンの生きにくさの問題や、ドロシーはなぜ灰色のカンザスに戻りたかったのか、という疑問が出てきました。「家は戻りたいところで当たり前」と言っているほど子どもたちも子どもを取り巻く環境も単純ではなく、また、かかしたちの生きにくさは、「皆とどこか違う自分」という欠落感を抱えた子どもたちの生きにくさに通じるように思われました。一方で、ボームの13作のシリーズは、子どもたちからの手紙のアイディアに基づいた、物語の法則から外れたハチャメチャでいいかげんな楽しさがありました。

そんな学びや議論の末、かかし、ブリキ、ライオンが子どもで、ドロシーが家族を考え、おとなと子どもの関係を描いた、むすび座ならではの「オズ」ができました。

楽しんでいただけましたら幸いです。



### 脚色●篠原久美子

劇団劇作家代表。公務員、舞台照明家を経て劇作家に。2002年『冬の終わりのゴキブリの…』でギャラクシー賞ラジオ部門奨励賞。2005年『ヒトノカケラ』で鶴屋南北戯曲賞ノミネート。2013年『空の村号』で斎田喬戯曲賞、他。演劇教育に携わり、2010年、実践記録『子どもたちと一緒に脚本を作る』で演劇教育賞特別賞。各地で『劇作ワークショップ』を行っている。紛争地域で読書や演劇の支援を行うピースセルプロジェクトのメンバー。

今回の篠原久美子さんによる脚色では、ドロシーだけでなく、かかし、ブリキ、ライオンも「子ども」という設定です。ジュディ・ガーランド主演の映画では、三人のおじさんが少女を守って旅をしていましたが、子どもたちが力を合わせて旅をすることで、より冒険のわくわく感が増しました。

また、かかし、ブリキ、ライオンは、自分に自信が持てない子どもですが、彼らは冒険を通じて、自信を取り戻していきます。三人がそれぞれほしかった知恵と勇気と心は、すでに自分の中にあっただのかもしれませんが、冒険と仲間との交流のなかで育まれたのかもしれませんが。いずれにしろ、子どもにとって、三人のキャラクターが身近にかんじられるものになっているのが、この脚色のすてきなところだと思います。

人形を製作していく過程でお願いをしたのは、多様性ということです。ドロシーは、人間とは違う存在の、かかし、ブリキ、ライオンと出会っても、そのことにおどろかず、ひるまず、当たり前のこととして、友だちになっていきます。あまりに当たり前描かれているので、気がつきにくいのですが、「オズのまほうつかい」の一番の魅力はここにあるのではないかと僕は感じています。子どもたちが、自分と違う存在の友だちと出会って、力を合わせて困難を乗り越えていく。そのようすを、子どもたちに見てもらい、自分ならどうするだろうと考えてもらえたらいいなと思っています。

人形劇ではさまざまなスタイルの人形を登場させることが可能です。抽象的な造形、具体的な造形、立体や平面などなど。人間が演じるときには、なかなかむずかしいことですが、人形劇ならなんでもできます。造形が様々になることで、オズの国の不思議さも増し、ドロシーと三人の子どもたちの個性も際だっているかと思えます。子どもたちが多様性に向き合う物語としての「オズのまほうつかい」。人形劇ならではの脚色と演出でどうぞご覧ください。



### 演出●関根信一

東京都葛飾区出身。1992年に劇団フライングステージを旗揚げ、作、演出と同時に俳優としても出演。主な演出作品に、ドラマ・リーディング「空の村号」(作:篠原久美子 アート企画陽だまり)、「はらっぱのおはなし」(作:篠原久美子 東京演劇アンサンブル)、「きみはいくさに征ったけれど」(作:大西弘記 青年劇場)、「わたしとわたし、ぼくとぼく」(作:関根信一 劇団うりんこ)、「つなりのレシピ」(作:福山啓子 青年劇場)など。



# オズのまほうつかい

ドロシーはある日、家ごと竜巻に巻き上げられて  
飼犬のトと一緒にオズの国にやってきました  
そこで出会った3にんの友だち **かかし**、**ブリキ**、**ライオン**  
4にんとトは、どんな願いもかなえてくれる  
「偉大なオズの魔法使い」に会うために旅に出ます  
**カカシは脳みそ!** **ブリキは心!** **ライオンは勇気!** をもらうため  
ドロシーは、我が家に帰るために...



ドロシー&トト    かかし    ブリキ    ライオン



うわ〜飛ばされる〜



♪ オズ大王さま待つてね ♪



オズの国へようこそ

♪ 黄色いレンガは つづいてる ♪



ブリキさん こんにちは



あたしドロシー  
よかったら友達にならない?

ぼく とっても  
おくびょうなんだ



エメラルドの都へ出発!

あたしは おうちに帰るの  
カンザスへ ♪



あのあの、ケンカはやめようよ...



カラスから守るのが  
おれの役目だ!  
畑も! 仲間も!



ここはどこ?



さぼってないだろうね



この薬を飲めば  
パパとママに会えるんだよ



みんな 気球を  
押さえるんだ!



カンザスへ連れて行って あたしのおうちへ!



お帰り  
ドロシー!



オズ大王さま お願いがあって来ました



ドロシーと別れるなんて  
さびしいよぉ〜



あの子はきっと  
帰ってきますよ



スタッフ  
脚色 / 篠原久美子 (劇団創作家)  
演出 / 関根信一 (劇団フライングステージ)  
美術 / 宮武史郎 小辻賢典  
音楽 / ノノヤママナコ (マナコプロジェクト)  
振付 / LONTO (ラストラダカンパニー)  
服部哲郎 (afterimage)  
衣装 / 長谷川真代  
照明 / 若狭慶大 (藤井照明)  
宣伝美術 / 杉江智子 (デザインキッズ)  
写真 / 服部義安  
制作 / 吉田明子 伊藤博美

むすび座の〈オズのまほうつかい〉は  
ドロシーだけではなく、  
かかしもブリキもライオンも子どもです。  
3にんは自分に自信がなく自分を好きになれません。  
そしてエメラルドの都に行けば  
オズの魔法で悩みが解決して  
自分を好きになることができると信じています。  
...でもそれは本当に魔法で叶えられるのでしょうか?



## むすび座のむすびは 心をむすぶのむすび

人形劇団むすび座は、1967年名古屋に誕生しました。

活動範囲は、東海地方を中心に全国に広がり、年間約17万人の皆さんにご覧いただいています。

人形劇は不思議です。転がっている時の人形はただのモノなのに、人形遣いが手に取ると魔法がかかったように命が吹きこまれ、笑ったり泣いたり怒ったり、いろいろな表情が見えてきます。

それは観客の皆さんが自らの想像力を十分に働かせて観ているからです。

〈想像力は人を思いやる心の源 自らの人生を切り拓く力〉

自分の行動を相手はどう受け止めるだろうと想像する事で人を思いやることができ、自分の未来を想像する事で自らの人生を切り拓くことができます。

想像力を育む人形劇は子ども達の心を育みます。

♪むすび座のむすびは心をむすぶのむすび♪

このむすび座の歌のように、子どもと子ども、そしておとなたちの心と心を結ぶことができたらと願っています。

 人形劇団 **むすび座**

〒459-8001 名古屋市緑区大高町字川添86

TEL(052)623-2374 FAX(052)623-9520

<https://www.musubiza.co.jp/>

E-mail:puppet@musubiza.co.jp